

第2回専門職大学基本計画検討委員会の開催結果について

1 日 時 令和2年9月14日（月） 14:00～16:20

2 委員会出席者

○会長 生源寺眞一（福島大学食農学類長）

○委員

芦谷竜矢（山形大学農学部教授）、今井敏（（独）農林漁業信用基金理事長）、牛尾陽子（東北大学監事）、小沢互（山形大学農学部教授）、北柴大泰（東北大学農学部教授）、嶋村和恵（早稲田大学商学学術院教授）、野堀嘉裕（山形大学名誉教授）、藤井弘志（（株）ファーム・フロンティア取締役会長）、村松真（山形大学地域教育文化学部准教授）、伊藤倫子（米沢牛いとう牧場（株））、早坂和紀（早坂果樹園）、八鍬良則（（株）ムラサキ農産代表取締役）、阿部多喜子（金山町森林組合森林施業プランナー）、遠田勝久（（有）遠田林産代表取締役）、阿部清（（公財）やまがた農業支援センター専務理事）、舟越利弘（山形県立農林大学校長）、片桐寛英（山形県教育次長）

3 会議の概要

事務局から「カリキュラム」、「入試」及び「名称」について資料により説明の上、意見交換を行った。

【主な意見】

○カリキュラムについて

- ・実習を主にした極めて実践的な内容である。悪天候等で実習等ができない場合も想定し、夏季休暇や春季休暇中の集中講義などをどのように使うか、考えておいた方がよいと思う。
- ・臨地実務実習について、労働契約を結ばないのは当然だが、今後、各地域への移動の経費、保険や食費などの諸経費をどうするのか考える必要がある。
- ・県内には、農林大学校の研修部、やまがた農業支援センター、JA中央会、市町村など、いろいろな農業者養成のシステムがある。これら既存の教育システムと専門職大学のカリキュラムが融合したり、関連性を持つことも考える必要がある。
- ・臨地実務実習は、学年に応じて段階的に目標を設定して学修し、受入側も指導していくことになるが、その設計が受入側にとって負担にならないか。ケースによっては1年ごとに実習先を変更するなど、受入先にとって負担とならないように運用を工夫してほしい。また、実習先を変更する場合は、継続性を持った実務実習が出来るよう検討が必要。
- ・果樹、野菜、花きなどの園芸学が1年生前期にあるが、一つの科目にまとまってしまっているため、きちんと学修できるような工夫が必要。
- ・臨地実務実習の受入側に対して、学生は働き手ではないことを明確に伝えてスタートする必要がある。学生の受入は負担となる。勉強がメインの働き手と、本当に働く働き手とは違うので、学生の实習には大学教員のサポートの充実を考えてほしい。

- ・臨地実務実習の受入先によって授業レベルに差が出てくると思われるので、臨地実務実習の詳細な運用指針を出すなど、受入側の体制について、今後考えていく必要があるのではないか。
- ・実習については中身が大切で、生産現場を見るだけではなく、取引先だったり経営者がやっていることを一緒に見るなど、生産技術のみにならないようにしてほしい。地域の若手の組織など、いろんな組織や地域とのつながりについて、卒業して地域に定着できるようにするために、農家がいろんな付き合いをしていることまで見てもらおうと良いと思う。
- ・1年生の体験実習では、どう感じたかを意見交換するなど、ぜひ内容を充実させてほしい。
- ・農林大学校では、1年生が6月下旬に10日間泊まり込みで実習に行っており、学生が他の学生に依存しないように、1か所に1人としている。専門職大学の120人（40人×3学年）と農林大学校の40人の受入先をしっかりと確保していく必要がある。
- ・圃場には簡単に増設できない施設もあるので、圃場実習についても細かく考える必要がある。また、専門職大学での資格取得についても、農林大学校のやり方を参考に、計画を立ててやっていけるとよい。
- ・2月から3月は苗づくりをするが、品目の仕上がりの半分は苗の仕上がりが影響する。学生には、学校の休業期間中でも実習先でぜひ見て学んでほしい。
- ・真夏と真冬で林業の作業（実習）がないが、最上地域では雪が降る時期でも間伐をやっている。真冬の間伐の作業に休業中の学生がアルバイトに来るのであれば、大学においてしっかり資格を取得させて作業ができるようにしておく必要がある。
- ・学生は自分が考える就職先に就いたときの満足度が高い。学生はモチベーションで満足度が変わってくる。どんな出口があるのか、自分が意識すると変わってくる。最初の動機付けが大事。学生のモチベーションを上げるため、いろんな先進農業者の話を講義等で聞くことができると良いと思う。その場合、10年先を見据えて人選して欲しい。
- ・専門職大学の卒業生が出るころには、スマート農業は今よりももっと進んでいる。対応したカリキュラム内容にしておく必要がある。
- ・将来の職業選択に関して、この教育課程で確立できるのか。「山形・東北学」などの科目が、将来選択できる職業や方向性を決めることができる内容だと良いと思う。
- ・自分自身、土壌・肥料学や気象学などの知識が最初からあったら良かったと就農後に感じたので、これらが学べるのは良いと思う。
- ・カリキュラムは全体的にうまく配置されていると思う。カリキュラムに入っている森林計画などは林業の基本となる学問であるが、ほかの大学の林業系学科で教えているところはほとんどなくなってきているので良いことだと思う。
- ・林業は、山側、木材加工側だけではなく、住宅産業、消費する側とのつながりなども重視し、木材産業の実習ができるとよい。
- ・林業者に必要な資格は取得できるとのことだが、どの科目を履修すればどんな資格が取得できるのか、今後、整理・明示していただけるとより良いのではないかと。
- ・専門職大学の1年生のカリキュラムは結構忙しいが、新規参入の意識が高い人には良いカリキュラムだと思う。
- ・臨地実務実習や基礎科目など、よく積み上げられていて分かりやすい。展開科目で幅広く学ぶ、農業だけではなく応用分野や学際分野、新しい産業なども学べるので、幅広く活躍できる人材を養成できると期待できる。

- ・最近の学生はお客様みたいになっており、「学校はしてくれなかった」とクレームを付ける学生が多い。そうした今の学生気質を考え、将来自分は何をしたいのかを自発的に考えていく力を付けさせる仕組みができると良いと思う。
- ・今後、設置を認可する文部科学省向けとは別に、学生の立場に立って、胸に響くカリキュラムとはどんなカリキュラムか、入学を希望する学生向けにどうアピールするかという観点からも考えておいた方が良いと思う。
- ・就職活動の時期が取れるのかが気になるので、就職に関する用意を大学がかなり手厚くしておく必要があると思う。

○入試について

- ・学力差の大きい学生を教育していくのが一番大変なので、入試である程度ターゲットを決めて、学生を集めるのがよいと思う。例えば、入学してほしい学生のターゲットとして農業・産業高校のトップの学生を集めれば、専門職大学のカリキュラムにも対応できるのではないかと思う。
- ・入学試験と入学定員の構成は、案のとおりでよい。入学試験の区分によって、入学者の専門知識や一般学力に差があることが考えられる。専門知識や一般学力が足りない部分は、ある程度大学側がきめ細かい配慮をしていくことを考えておいた方がよい。
- ・一般入試は4科目あるが、各科目の配点はどうするのか今後検討する必要がある。それによって、集まる学生もだいぶ違うと思う。
- ・入学試験の区分については、案のとおりで異論はない。指定校推薦型選抜の選考方法が書類と訪問面接だけになっており、学力を問うていない部分が不安に思う。推薦入試は、入学者数確保の観点もあるので、継続して検討してほしい。
- ・入試は非常に重要で、学生確保の面もある。一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜それぞれの特徴を考え、入学する人数を確保する必要がある。
- ・入試については案のとおりで良いと思う。選考方法に含めなくてもよいが、総合型選抜・指定校推薦型選抜の受験者に大学入学共通テストを受けるようお願いすることも検討してはどうか。推薦と一般選抜で入ってきた学生では学力差が大きく、授業等で情報を収集する能力も違ってくると思う。
- ・農業系の部活で頑張った生徒で専門職大学に進学したいという生徒は、間違いなく農業に関心が高い。そういう生徒を入学させて育てていくのは大事なことだと思う。
- ・現状、前期日程（2月下旬）は第一志望の大学にチャレンジして、後期日程（3月上旬）は山形の大学を受験すると考えている生徒も相当数いると思う。東北の大学で食を含めて農の希望者は入学定員の2倍くらいはいるので需要はある。具体的な入試日程の詰めはこれからだと思うが、高校側としては、後期日程の募集枠も検討してもらえると良いと思う。
- ・最近、新型コロナウイルスの影響もあり、経済面を気にする生徒が多い。親元就農は儲からないと言われてきたが、新規就農者を見ると、きちんとやっている方は、他産業に就職している人より儲けている人も多い。選択肢の一つとして、そうした農業の明るさをしっかりPRしていくことも大事。

○大学名称、学部・学科構成、学位の名称について

- ・大学の名称は、3要素（東北、農林、専門職）を含んだものでよいと思う。
- ・名称については、東北の他県で専門職大学を作る動きがないので、「東北」と付け

でも問題ないと思う。

- 大学の名称に「東北」を付けた方が、これくらいの意識を持ってやるという意味でもよい。
- 戦前に我が国に存在していた「林学士」の学位名称が、戦後「農学士」に統合された。今回、約70年振りに我が国で「林学士」の学位が復活することは、林学者としても喜ばしく思っている。

以上